

佐藤志津没後一〇〇年記念展

佐藤志津 と 私立女子美術学校

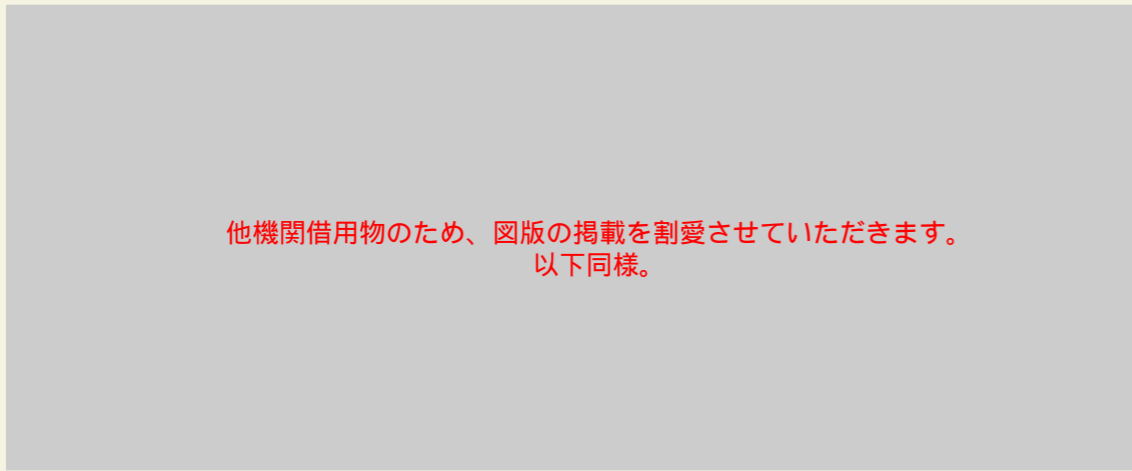


第1章 佐倉藩と順天堂

日本近代医学の先進地

下総国佐倉（現在の千葉県佐倉市）を本拠地とした佐倉藩は、江戸時代初期には藩主が頻りに交代したが、延享3年（1746）以降は堀田氏の所領として定着した。開国派老中として知られる堀田正睦らが著名である。

幕末の蘭方医・佐藤泰然（和田泰然、1804-1872）は、武蔵国川崎（現在の神奈川県川崎市）で生まれ江戸で育ち、蘭方医を志して足立長雉の門に入り、長崎に遊学。オランダ館長 J.E. ニーマン、通詞出身の蘭方医に教えを受けた。天保9年（1838）江戸に帰り日本橋薬研堀にて西洋医学塾を開設し、門弟を集め西洋医学による治療と医学教育を行った。天保14年（1843）佐倉に移り、順天堂を掲げた。佐倉順天堂には日本各地から西洋医学を学ぶために多くの人材が集まり、日本近代医学の先進地となった。



他機関借用物のため、図版の掲載を割愛させていただきます。
以下同様。

1. 千葉県佐倉順天堂全景図『大日本博覧図』 佐倉市教育委員会所蔵

第2章 生い立ち

佐藤家に育つ



2. 佐藤志津 大正期
女子美術大学歴史資料室所蔵

佐藤志津（静・静子とも表記）は、嘉永4年（1851）、常陸国行方郡麻生（現在の茨城県行方市）にて、後に順天堂第二代堂主・佐藤尚中となる山口舜海（1827-1882）とさだの長女として生まれた。舜海は佐藤泰然に外科手術法を中心とする蘭方医学を学び、才能を認められ後継者として養子となったことから、志津も佐藤家に入った。

尚中は、その後、長崎にてオランダの医師・ボンペに西洋医学を学び、佐倉養生所・順天堂医院を開設したほか、大学東校（現在の東京大学医学部）初代校長に就任するなど日本における近代医学、またその教育の基礎を築いた。

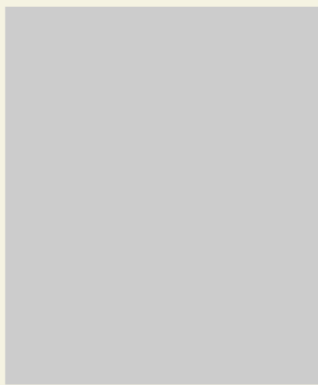
志津は、幼少期より漢学や国学を学び、安政6年（1859）、8歳の時に水戸の藤枝富右衛門方に預けられ、三味線、長刀、香道、茶道などを修めた。元治元年（1864）、13歳の時に堀田正睦の息女である松姫のお相手として御殿に上がり、姫とともに茶道、読書、和歌、細工などを身に付けた。慶応3年（1867）、16歳の時にさだが病没、その後は志津が幼い弟妹の世話や家事、塾生の面倒を取り仕切ったという。



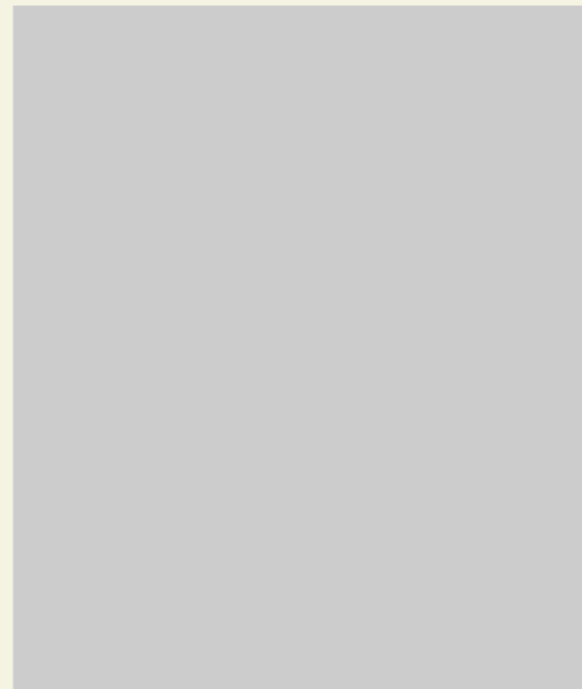
3. 佐藤志津旧蔵 鼓 順天堂大学・日本医学教育歴史館所蔵



4. 佐藤志津旧蔵 篋 個人蔵



5. 佐藤昇追善供養記念品 蒔絵箱 個人蔵
資料4・5には、佐藤家の象徴である藤と家紋の源氏車の文様が表されている



6. 佐藤志津旧蔵 帷子（一部）
女子美術大学芸術学部デザイン・工芸学科工芸専攻刺繍所蔵



7. 佐藤志津旧蔵 白地滝松竹紅葉菊模様帷子裂
女子美術大学歴史資料室所蔵



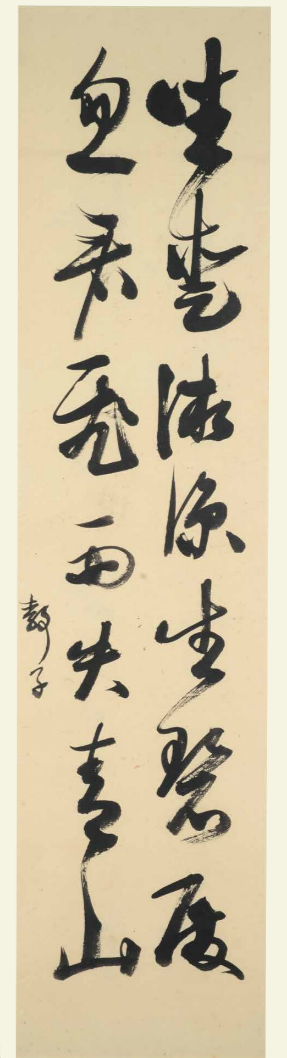
8. 佐藤志津《野芳發而幽香佳木秀而繁陰》 女子美術大学歴史資料室所蔵



9. 佐藤志津《坐臥逸身唯水竹登臨滿目但雲山》 女子美術大学歴史資料室所蔵



10. 佐藤志津《細雨寒風宜獨坐暖天佳景即閑遊》 女子美術大学歴史資料室所蔵

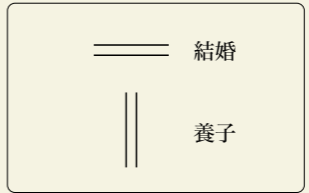
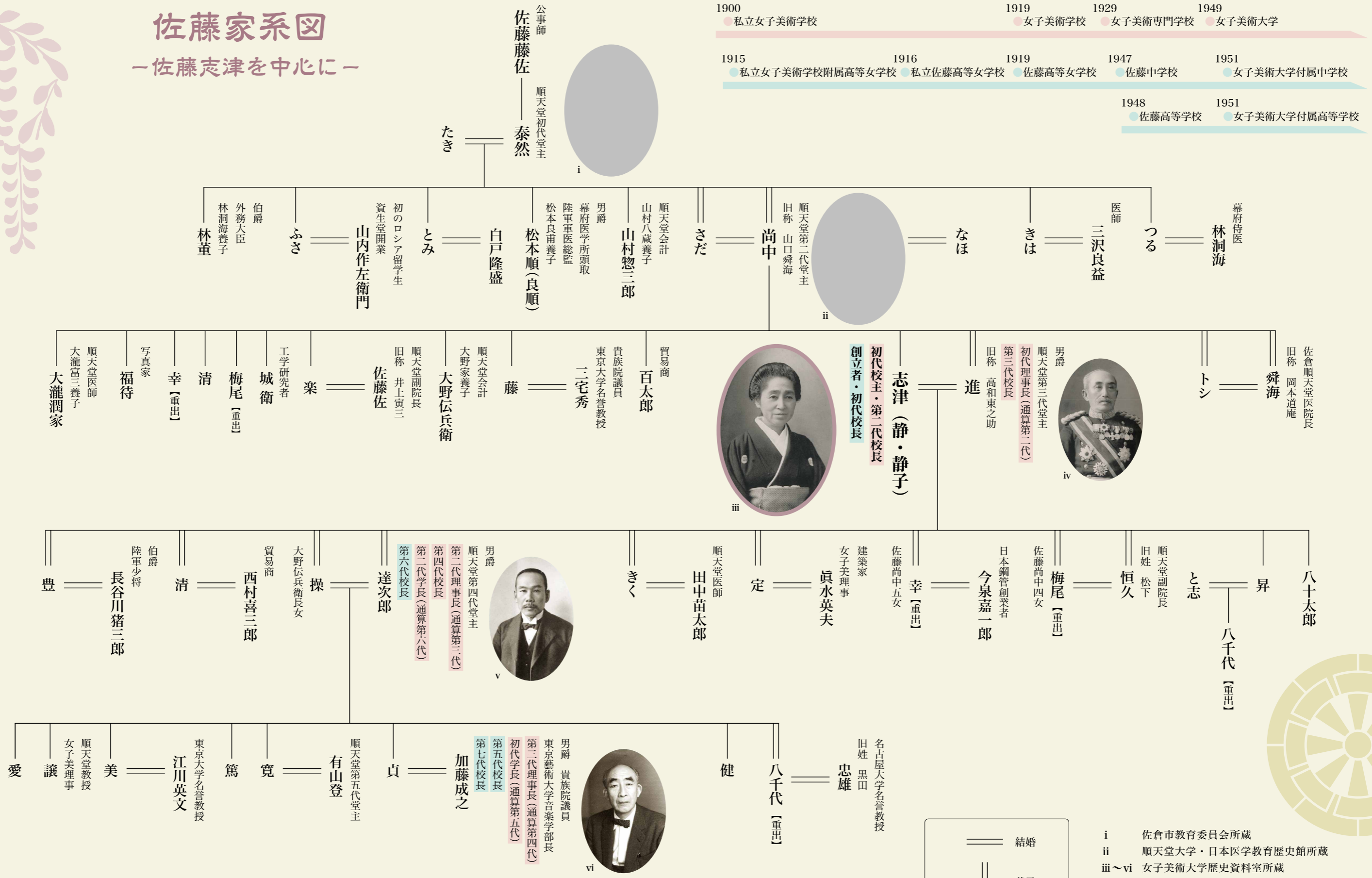


11. 佐藤志津《坐愛微涼生碧殿忽看飛雨失青山》 女子美術大学歴史資料室所蔵

佐藤家系図

—佐藤志津を中心に—

- 1900 ● 私立女子美術学校
- 1915 ● 私立女子美術学校附属高等女学校
- 1916 ● 私立佐藤高等女学校
- 1919 ● 佐藤高等女学校
- 1919 ● 女子美術学校
- 1929 ● 女子美術専門学校
- 1947 ● 佐藤中学校
- 1948 ● 佐藤高等学校
- 1949 ● 女子美術大学
- 1951 ● 女子美術大学付属中学校
- 1951 ● 女子美術大学付属高等学校



i 佐倉市教育委員会所蔵
 ii 順天堂大学・日本医学教育歴史館所蔵
 iii~vi 女子美術大学歴史資料室所蔵

参考資料:「藤のゆかり」1933年4月増補改訂版



佐藤進との結婚

志津の夫となった佐藤進(1845-1921)は、さだの甥で、安政6年(1859)に佐倉順天堂に入塾。頭角を現したことから尚中の後継者として養子となり、慶応3年(1867)に志津との結婚に至る。

進は、明治2年(1869)に明治政府の公式旅券第一号を得て、ドイツ・ベルリン大学に留学。東洋人としては初の医学博士の学位を取得。帰国後は順天堂医院第二代院長に就任、最先端の医療と教育を実践したほか、医学書を刊行するなど日本における近代外科学の発展に努めた。平時は順天堂院長や東京大学医学部第一医院・第二医院院長を務め、西南戦争の際には陸軍軍医監として大阪の陸軍臨時病院長を務めた。日清戦争の際にも陸軍軍医監として広島予備病院長を務め、明治28年(1895)には陸軍軍医総監となった。夫不在の間、志津は独り家庭と順天堂を支えた。



12. 佐藤進
大正8年(1919)
女子美術大学歴史資料室所蔵

13. 初代五姓田芳柳
《西南役大阪臨時病院負傷兵施術光景》
明治14年(1881)水彩・絹
東京藝術大学所蔵
明治10年(1877)西南戦争の際に陸軍軍医監を務めた佐藤進は、大阪の陸軍臨時病院長となり、軍医の指揮監督や患者の治療にあたった。前列中央の左を向いた人物が進。賛は松本順(良順)。

社会貢献活動

志津は、進とともにたびたび鹿鳴館に招待され、国内外の著名な人々と交流を持つとともに、同館で行われた慈善団体によるバザー等の活動に参加した。

また、慈善団体の評議員や幹事を務め社会貢献に関わった。なかでも孤児や貧しい子供のための育児施設を設立した福田会恵愛部の活動においては、発起人の一人として寄付を募り、施設拡大や院児増員を目指した。

明治27年(1894)には日本赤十字社篤志看護婦となり、看護婦が職業として定着していなかった当時において看護婦の増員・地位向上に貢献した。



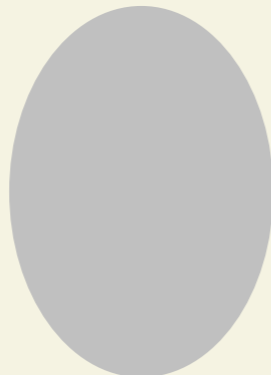
- 左より
14. 佐藤静子(志津)名刺(表・裏) 佐倉市教育委員会所蔵
裏面には「Baroness(男爵夫人) S. Sato」と表記されている。
15. 佐藤志津名刺(表) 佐倉市教育委員会所蔵
16. 佐藤進名刺(表) 佐倉市教育委員会所蔵

女性医師の支援

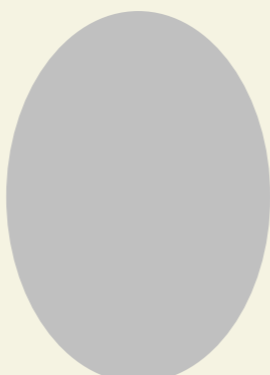
明治17年(1884)、女性が医術開業試験を受験できることとなり、女性に医師の道が開かれたが、志津は進とともに女性医師の先駆けとなった者たちを支えた。

日本で3人目の公許女性医師・高橋瑞子(1852-1927)は、後期試験のために順天堂医院に学んだが、進の配慮で入学金を免除された。また、開業する際に、志津によって資金面で支援を行った。

同じく女性医師の吉岡彌生(1871-1959)は、医学校在学中から医師開業資格取得前後にかけて順天堂医院に実地見学に通った。吉岡は外科手術を遠くから見る程度だったが、当時においては貴重な経験であったと回想している。また、2人が学んだ医学校・済生学舎は一時女子の入学を認めていたが、風紀の乱れを理由とし明治33年(1900)に女子の入学を中止した。それを機に吉岡は同年女子のための医学校・東京女医学校(現在の東京女子医科大学)を創立させた。



17. 高橋瑞子
年代不詳
東京女子医科大学所蔵



18. 吉岡彌生
明治33年(1900)
東京女子医科大学所蔵

第3章 横井玉子との出会い

私立女子美術学校創立

私立女子美術学校(現在の女子美術大学・女子美術短期大学部)は、明治33年(1900)10月、横井玉子・藤田文蔵・谷口鐵太郎・田中晋の4名により創立された。

中心的役割を担った教育家の横井玉子(1854-1903)は、明治5年(1872)に18歳で横井小楠の甥である左平太と結婚し、わずか3年後に夫が病没した後、熊本より上京、東京府師範学校(現在の東京学芸大学)にて高等裁縫・高等女礼式の教員資格検定試験に合格し教員となった人物である。上京後に洗礼を受けキリスト教徒となった玉子は、ミッションスクール・新栄女学校の教員(裁縫・礼式)や事務監督となり、同校が他校と合併し女子学院となった後も教員(裁縫・礼式・料理・図画)や寄宿舎舎監などを務めた。

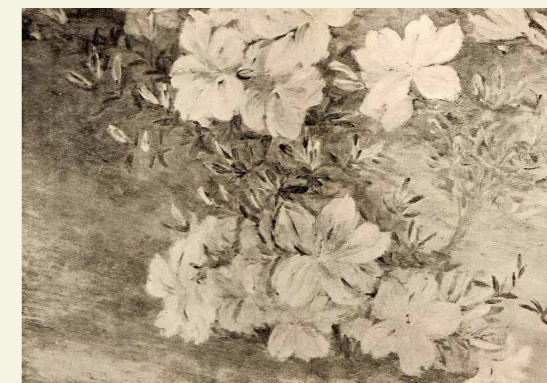
また、小楠の妻・つせ子の妹で、女子学院初代院長であった矢嶋楯子が結成した東京婦人矯風会(現在の日本キリスト教婦人矯風会)に参加。廃娼・禁酒禁煙・一夫一婦制の確立など女性の地位向上や社会改良のために活動した。特に貧しい女子に自活の道を開くための職業訓練機関である女子慈愛館の設立に尽力した。私立女子美術学校開校後は、舎監および事務監督を務めた。



19. 横井玉子
明治26年(1893)
女子美術大学歴史資料室所蔵



20. 横井玉子 チョーク画(模写)
横井玉子『家庭料理法』富山房 明治36年(1903)より転載



21. 横井玉子 油彩画
横井玉子『家庭料理法』富山房 明治36年(1903)より転載

同じく創立者となった彫刻家の藤田文蔵(1861-1934)は、明治9年(1876)に日本で初めて設立された官立の美術学校である工部美術学校彫刻学科に入学し、イタリア人彫刻家ヴィンチェンツォ・ラグーザに塑造を学んだ後、写実的な作風を特徴とした彫刻家として活躍するとともに、洋風彫刻の教育に尽力した人物である。明治20年(1887)には東京美術学校(現在の東京藝術大学)の彫刻科教員となり、一旦退職するものの、同33年(1900)には同校塑造科教員に就任し、同38年(1905)まで務めた。同校と兼務する形で私立女子美術学校初代校長を務めた。

また、文蔵は、牛込基督教会初代長老・藤田盡吾の養子となったことから洗礼を受けキリスト教徒となり、晩年は積極的にキリスト教伝道を行った。大正13年(1924)には世田谷基督教会(現在の世田谷キリスト教会)を創立させ同教会牧師となった。



22. 藤田文蔵
年代不詳
女子美術大学歴史資料室所蔵



23. 藤田文蔵《イコン》石膏・着色
年代不詳
女子美術大学歴史資料室所蔵



24. 藤田文蔵考案 私立女子美術学校校章
女子美術大学歴史資料室所蔵
藤田文蔵により三種の神器・八咫鏡の中に「美」の文字を配したデザインの校章が制定された。

堀田家(旧佐倉藩主)からの支援を物語る史料

26. 下総佐倉堀田家文書 佐藤進書簡(美術学校建築費献金願につき) 田村利貞宛 明治34年(1901)12月28日付

公益財団法人日産厚生会佐倉厚生園病院所蔵・佐倉市寄託

拝啓益御清祥
奉賀候、然者先日者参上
敷度御邪魔仕候段御海
容可被下候、其節懇願
仕候にて美術学校建設ニ
就而者、尽ク弊家之負担ニ
囑し、乍微力社会之為
貢獻いたし度精神ニ
有之候、御承知之通り貴願
紳士之賛成者も多ク御座候
次第にて、老生従来交際
之親疎ニ不拘多之
御華族方ニ寄附金ヲ
仰キ候覚悟ニ御座候、就而ハ
屢々申述候通り、堀田様
事者旧君臣之関係モ
有之、普ク諸人之悉知仕居候
事ニ有之故、寄附金
名簿初筆トシテ記載
いたし度奉存候、近頃甚
御迷惑之儀ト奉存候得共、
千円乃至五百円より不少
金額御惠贈ニ預り度
一同懇願仕居候次第ニ
御座候、貴下よりも此度之
事情篤ト御諒察
被下国家之為御献金被下ニ
様御協議奉仰候、来春
早々募集ニ着手仕度
協議員一同之決議ニ付、
此段承知被下度奉願上候、
節拝願拝肩不取敢右
願用迄如此御座候、乍未
佐治君江も可然御伝音
奉願上候、早々敬具
十二月廿八日 佐藤進
田村利貞様
机下

史料解説

佐藤志津の夫・佐藤進から堀田伯爵家の家扶・田村利貞に宛てた私立女子美術学校建設の資金援助を堀田家に頼った書簡である。美術学校の建設費用については「尽ク弊家之負担ニ囑し」と佐藤家の負担であるとしたうえで、「社会之為貢獻いたし度精神」という、美術学校設立に対する佐藤進の考えが示されている。「堀田様事は旧君臣之関係」「寄附金名簿初筆トシテ記載いたし度」という文言があり、旧佐倉藩主・堀田家と佐藤家との旧来の関係を強調して、1000円から500円という多額の金額の拠出を願っている。

この書簡を受け取った田村利貞からは、佐藤家はいろいろと世話になっている家であるので、このたびは500円以下の拠出はやむを得ないのではないかという旨の書簡を佐倉堀田邸・家扶の浦岡忠に送っている。

また、堀田伯爵家の東京邸における家扶の日々の記録である「東京邸家扶日記」(公益財団法人日産厚生会佐倉厚生園病院所蔵・佐倉市寄託)の明治34年12月には、佐藤進が私立女子美術学校設立に対する資金援助を求めて堀田邸を訪れている記載が見られる。

- 佐藤進女子美術学校設立賛成願書を堀田邸に持参する
「東京邸家扶日記」明治三十四年十二月十四日条
一 佐藤進殿午前十一時頃参邸、利貞出会此度女子美術学校設立ニ付、賛成願書類差添差出ス、佐倉へ伺出ス
- 佐倉から女子美術学校設立賛成承諾書届く
「東京邸家扶日記」明治三十四年十二月十七日条
一 佐藤進方駒込之女子美術学校設立ニ付御賛成之義御承諾之旨佐倉申越候間、直其旨及御達置候
- 堀田家から佐藤進への御歳暮下賜
「東京邸家扶日記」明治三十四年十二月二十八日条
一 佐藤進殿義、御病用之分彼是御世話被相成候ニ付、御歳暮被下 左ニ 利貞罷越ス
一 御反物料 金拾五円
右早速御礼ニ参邸致候

このような堀田伯爵家の記録からも私立女子美術学校設立に向けて佐藤進からの堀田家へ援助を依頼し、堀田家側もそれに対応している様子がうかがえる。「東京邸家扶日記」においては「女子美術学校設立」と記載されているが、すでに私立女子美術学校は設立されていることから、「建設」という意味合いで使われていると考えられる。

解説・翻刻 土佐 博文(佐倉市役所総務部行政管理課市史編さん担当)

玉子・文蔵らによって明治33年10月に東京府に提出された私立学校設立願には、「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」という3つ設立趣旨が記された。

また、当時、官立の美術学校であった東京美術学校では女子の入学を認めなかったため、本学は、ほぼ唯一の女子ための美術学校として女子高等美術教育機関の道を開いた。

初代校主・第二代校長に就任

明治34年(1901)4月、東京府東京市本郷区弓町2丁目(現在の東京都文京区本郷)の校舎にて私立女子美術学校の最初の入学式が行われたが、教職員16名、入学生14名という状況で、経営状態は芳しくなかった。また、この頃、創立者4名のうち谷口鐵太郎・田中晋が学校を去り、出資金返済を求めたため、経済状態は一層深刻となった。この頃、すでに胃がんの病魔に侵されていた玉子は、身を削って資金援助に奔走し、文蔵は東京美術学校教授として受け取る報酬のすべてを資金に充てるなどしたが、経済状態は一層深刻となり、廃校の危機へと追い込まれた。

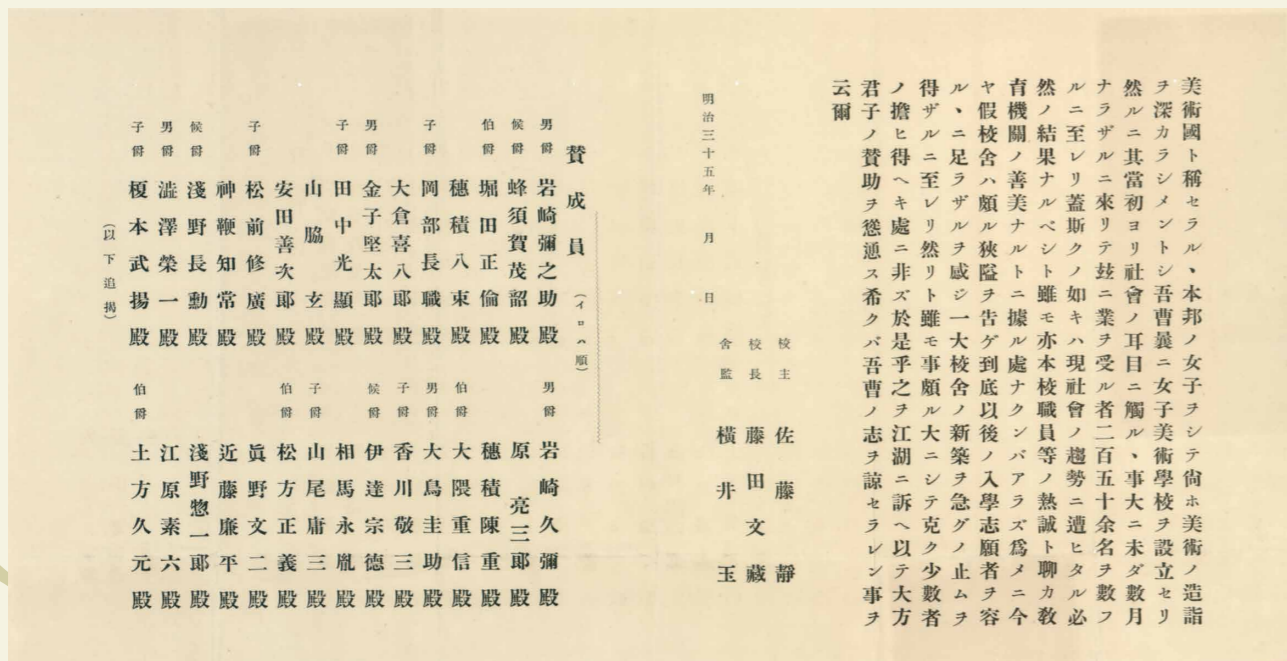
玉子らは、開校当初から本学の賛成員を務めたといわれる佐藤志津に学校経営への参画を求め、これを志津が受け入れた。明治34年(1901)11月、文蔵・玉子は志津に対し、「発起人」の権利を志津に一任した上で志津の指揮のもと誠実に尽力することを約束する誓約書を提出した。翌年1月、志津は正式に校主に就任した。同じ頃、玉子の病状が深刻となり、順天堂医院で治療を受けるが、快方せず、明治36年(1903)1月に逝去した。

明治37年(1904)1月には、当初の創立者に替わり志津が「設立者」となる旨を記した設立変更届を提出。また、同年、文部大臣に校長変更届を提出し、志津は第二代校長となった。

第4章 私立女子美術学校経営の再建と志津没まで

校舎増築事業に尽力

校主就任の頃より次第に中途入学者が増え、教室が不足する状態となったため、志津は最初の事業として校舎増築を計画した。進を中心とする佐藤家の多岐に渡る人脈を生かし、積極的に寄付を求めていった。この時期の新校舎建設のための寄付を求める書簡によれば、学生数がすでに250名を超えており、当時の校舎では新たな入学生を受け入れることが困難である事情が記されている(図25)。また、同資料には「賛成員」として著名な教育家、政治家、実業家の名前が列挙されている。こうした呼びかけにより多数の支援があり、校舎増築は実現され、同年4月には校舎増築上棟式が開催された。増築の結果、生徒200名、寄宿生30名の定員であったのが、生徒400名、寄宿生60名にまで増員が可能となった。



25. 校主・佐藤静(志津)、校長・藤田文蔵、舎監・横井玉(玉子)を差出人とした新校舎建設のための寄付を求める書簡 明治35年(1902) 女子美術大学歴史資料室所蔵

弓町校舎の火災と菊坂校舎建設



明治41年(1908)10月、用務員の灰の不始末により弓町校舎3階裁縫科教室から出火し、一部を除く校舎・寄宿舎の大半が焼失する大規模な火災が起きる。増築された校舎や教材などが一夜にして灰燼に帰した。この時、茨城県の別荘に滞在していた志津は、急遽上京し、落ち着いた態度で適切な指示を下し、火災から一週間後には焼け跡に仮校舎を設置、授業が再開された。裁縫科教室からの出火に責任を感じて進退伺いを提出した主任教師に対してはその責任を問うことはせず寛大な処置をした。

また、志津は、この機に近隣の本郷菊坂町に新たな土地を購入し、本格的な新校舎の建設を計画する。従来赤字経営の連続であり、志津が私財を投じて辛うじてその欠損を埋めていただけに、家族や関係者にとっては予想外であったが、志津は再び知人縁者を説いて出資金、寄付金を募り、また自分の衣類や調度品までも売却して新校舎建設の費用に充てた。この行為は人々に「志津校長は自分の着物を脱いで学校に着せた」と形容された。同年冬には菊坂町の新校舎建築工事が着工され、翌年7月に木造3階建の校舎が付帯設備とともに竣工した。この校舎は菊坂校舎と称され、昭和10年(1935)に豊多摩郡和田堀町和田(現在の杉並区和田)に移転するまで約25年間使用された。この時代、「菊坂の女子美」として世に名が通るようになる。



上より 27. 私立女子美術学校 菊坂校舎 明治42年(1909)7年竣工 女子美術大学歴史資料室所蔵
28. 佐藤志津(前列左から11人目)と生徒・教員 菊坂校舎にて 明治42~大正7年(1909~1918) 女子美術大学歴史資料室所蔵

附属高等女学校創立

私立女子美術学校の各科に設置された普通科は、入学資格、学科配当、教授時数などの実質は、実科高等女学校とほとんど変わりがなかったが、その設立が各種学校令によるものであったため、高等女学校令の規定によって設立された高等女学校の得る公認の各種の資格をもつことが許されなかった。この問題の解消のために、志津は大正4年(1915)2月に私立女子美術学校附属高等女学校(現在の女子美術大学付属高等学校・中学校)を創立させた。私立女子美術学校に隣接する土地を購入、新校舎を建設し、自ら初代校長に就任した。

翌年、私立佐藤高等女学校と改称。私立女子美術学校主監であった戸野みちえを第二代校長に迎え、志津は名誉校長となった。さらに、同年、学則の大幅な改正を行った。佐藤高等女学校に実科を設置し、私立女子美術学校の日本画・西洋画を除く普通科在籍生を試験の上、実科の各学年に転入させた。それにともない、私立女子美術学校の普通科を廃止した。開校初年度の入学生はわずか11名だったが、翌年に約50名が入学、2学年に十数名が転入し、体制が整えられた。



29. 佐藤高等女学校生徒たち 昭和4年(1929)頃 女子美術大学歴史資料室所蔵



30. 佐藤高等女学校制服バックル 大正13~昭和4年(1924~1929)頃 女子美術大学歴史資料室所蔵

女子教育功労者として表彰される



31. 勲章を受けた佐藤志津 女子美術大学歴史資料室所蔵

大正4年(1915)、志津は女子教育の功労者として勲六等を叙され宝冠章を授与された。この時、ともに受章したのは、女子学院初代院長の矢嶋桐子や女子英学塾(現在の津田塾大学)創立者の津田梅子などいずれも女子教育に尽力した教育者たちであった。さらに、大正7年(1918)には帝国教育会より教育功労章を授与された。

この頃、女子教育に対する一般の理解が深まり、また好景気も影響して私立女子美術学校・私立佐藤高等女学校両校の入学者はさらに増加し、赤字が続く経営状態にも好転の兆しが見えた。

志津の逝去

大正7年(1918)冬、志津は流行性感冒にかかり、翌年には肺炎を併発、順天堂医院にて治療が施されたが、その甲斐なく、大正8年(1919)3月17日に67歳で逝去した。同月21日に駒込吉祥寺にて葬儀が営まれ、佐藤家・順天堂ゆかりの人々や本学の関係者・教職員約800名の他に、各界より多くの弔問客が参列し、荘厳で格式高い葬儀となった。

第5章 志津没後100年の女子美の歩み

佐藤進から佐藤達次郎へ

志津は、生前、個人経営の形態をとっていた本学を財団法人化し、大正6年(1917)、理事長として佐藤進を就任させ、自らは理事の一人となった。志津の逝去後、進が理事長と兼務するかたちで第三代校長に就任した。しかし、進は、大正10年(1921)、在職2年余りで逝去した。

同年、進・志津の養子であり、順天堂第四代堂主の佐藤達次郎(1868-1959)が第二代理事長・第四代校長となる。大正14年(1925)、女子美術学校は創立25周年を迎え、創立10周年を迎えた佐藤高等女学校とともに青山会館にて記念大祝賀会を開催した。達次郎の在職時に、佐藤高等女学校の生徒定員を増員するなどして順調な学校経営が実現された。

女子美術専門学校への昇格

昭和2年(1927)、本学は文部大臣に専門学校の認可を申請し、昭和4年(1929)に認可を受け、女子美術専門学校となった。

大正末期、菊坂校舎は修繕箇所が増え、女子美術専門学校・佐藤高等女学校の両校生徒約1500名が学ぶには狭い校舎となっていた。そのために新校地獲得を検討し、昭和3年(1928)に豊多摩郡和田堀町和田(現在の杉並区和田)に校地を取得した。これが現在の杉並キャンパスである。それにともない女子美は昭和9年(1934)から翌年にかけて杉並校舎へ移転、一方で佐藤高女は菊坂校舎に残り同校舎を使用した。第二次大戦下において杉並校舎は空襲の被害を逃れたが、菊坂校舎は昭和20年(1945)3月の空襲により全焼し、佐藤高女は杉並校舎に移転を余儀なくされた。

女子美術大学・女子美術大学短期大学部の発足

昭和23年(1948)、学制改革に伴い女子美術大学の設立を申請し、翌年認可を受け、女子美術大学が発足した。また、昭和24年(1949)、短期大学部の設置を申請し、翌年認可を受け、女子美術大学短期大学部が併設された。

昭和31年(1956)、火災により杉並校舎の大半が焼失した。保護者や同窓会による総額1億円の募金等の協力もあり、次々に新校舎が建設された。

昭和55年(1980)、杉並校舎にて創立80周年記念式典が挙行され、『女子美術大学八十年史』が刊行された。

平成2年(1990)、本学は神奈川県相模原市に相模原キャンパスを開設した。同年、創立90周年記念式典が開催され、『創立九十周年記念写真集』が刊行された。

創立100周年を経て

平成12年(2000)、本学は創立100周年を迎え、記念式典・記念講演会、『女子美術大学百年史』等の刊行、展覧会「ヴィーナスたちの100年」など様々な記念事業を行った。

創立110周年を迎えた平成22年(2010)、教育組織を大幅に改組し、現在は、大学院美術研究科(博士後期課程/博士前期課程)、芸術学部(美術学科/デザイン・工芸学科/アート・デザイン表現学科)、短期大学部(造形学科/専攻科)にて「美を追求し命を尊ぶ心豊かな社会を創造する」という学園のビジョンのもとに約2900名の学生が学んでいる。

女子美術大学付属高等学校・中学校は、平成27年(2015)に創立100周年を迎え、記念式典の開催、『女子美術大学付属高等学校・中学校 創立百周年記念 略年史』刊行等の記念事業が行われた。教育理念に「智の美」「芸の美」「心の美」を掲げ、現在、約1050名の生徒が学んでいる。



32. 佐藤志津像・横井玉子像 創立110周年記念事業の一つとして平成23年(2011)11月女子美術大学相模原キャンパスに設置された。左が佐藤志津像、右が横井玉子像。津田裕子(名誉教授)制作。

佐藤志津 略年譜

西 暦	和 暦	年 齢	事 項
1851	嘉永4	0	5月11日、父・山口舜海(後の佐藤尚中)、母・さだの長女として生まれる。
1853	嘉永6	2	佐藤尚中、佐藤泰然の養子となる。
1855	安政2	4	この頃から岡本道庵に漢学を、濱野東に国学を学ぶ。
1859	安政6	8	父母と離れ、水戸の藤枝富右衛門方に預けられる。ここで三味線、長刀、香、花、茶などを習う。
1864	元治元	13	堀田正睦の息女・松姫のお相手となり御殿に上がる。
1867	慶応3	16	さだ病没。
			佐藤進と結婚。
1869	明治2	18	佐藤進、ドイツ・ベルリン大学留学のために旅立つ。
1872	明治5	21	尚中、有志とともに日本橋本町に日本初の私立病院「博愛舎」を設立。
1873	明治6	22	尚中、下谷練堀町に「順天堂」を開き、診療と基礎・臨床の医学教育を行う。
1875	明治8	24	尚中、湯島に順天堂医院を新築移転。進、帰国。
1877	明治10	26	西南戦争勃発、進は陸軍軍医監として大阪の陸軍臨時病院長を務める。
1889	明治22	38	発起人の一人として福田会恵愛部を創立させる。
1894	明治27	43	日本赤十字社篤志看護婦となる。
			進、陸軍軍医監として広島予備病院長を務める。
1895	明治28	44	進、陸軍軍医総監となる。
1900	明治33	49	横井玉子・藤田文蔵らによって私立女子美術学校創立。
1901	明治34	50	私立女子美術学校 第一回入学式開催。
1902	明治35	51	私立女子美術学校 初代校主となる。
1903	明治36	52	横井玉子病没。
1904	明治37	53	私立女子美術学校初代校長・藤田文蔵が辞職した後、第二代校長に就任。
			私立女子美術学校弓町校舎増築事業をなす。
1908	明治41	57	火災により弓町校舎焼失。本郷区菊坂町に新たな土地を取得、新校舎建設(翌年7月竣工)。
1915	大正4	64	女子教育功労者として勲六等を叙され宝冠章を授与される。
			私立女子美術学校附属高等女学校創立、初代校長となる。
			私立女子美術学校創立15周年記念式典・祝賀会举行。佐藤志津像設置。
1917	大正6	66	財団法人私立女子美術学校に組織変更。理事長に佐藤進が就任。
1918	大正7	67	長年女子高等教育に従事し、多くの功績をあげたことにより帝国教育会より教育功労章を授与される。
1919	大正8	67	3月17日、逝去。
			進が私立女子美術学校第三代校長に就任。



創立120周年記念事業

佐藤志津没後100年記念展 佐藤志津と私立女子美術学校

会期：2019年3月8日～7月15日

会場：女子美術大学歴史資料展示室

主催：学校法人女子美術大学

協力：学校法人順天堂

公益財団法人日産厚生会佐倉厚生園病院

佐倉市教育委員会

佐倉市行政管理課市史編さん担当

後援：一般社団法人女子美術大学同窓会

杉並区

佐藤志津没後100年記念展
佐藤志津と私立女子美術学校
パンフレット

発行日 | 2019年3月8日発行

編集 | 高橋 直子 (女子美術大学歴史資料室)

表紙デザイン | 鬼塚 敬子 (女子美術大学歴史資料室)

制作 | 小磯 かおり (株式会社ケンス)

発行 | 学校法人女子美術大学
東京都杉並区和田1-49-8 TEL 03-5340-4500 (代表)